

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Japanese Language Researcher Asano Shin's Norm Consciousness: "Zenzen kono okashi suki da wa" in 1935

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新野, 直哉, NIINO, Naoya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000742

国語学者浅野信の言語規範意識

—昭和10年の「全然このお菓子好きだわ」について—

The Japanese Language Researcher Asano Shin's Norm Consciousness:
“Zenzen kono okashi suki da wa” in 1935

新野 直哉 (NIINO Naoya)

1. “全然”をめぐる「迷信」

「“全然”は本来否定を伴う副詞である」という言語規範意識は、国語史上の客観的事実と反しており、「迷信」と呼ぶべきものであることは、現在では相当程度知られている。筆者は、この規範意識の発生時期はいつか、戦前にまで遡れるのか、という問題について考えるため、先行研究では注目されなかった、戦後を目前に控えた時期である昭和10年代（1935～1944）の国語学・国語教育・日本語教育の専門誌における“全然”の使用実態を調査し、当時のこの語に関する規範意識について考察した。その結果、占領地域への日本語普及という当時の国家的重要課題を念頭に置いた、「標準語」「正しい日本語」をめぐる記事・論文の中でも、“全然”に関する言及は見られず、その一方で今日では「誤用」とされるような“全然”が肯定を伴う例（以下「“全然”+肯定」の例」とする）が少なからず見られた。

この事実は、当時のプロジェクトメンバー全員の共同発表である新野・橋本・梅林・島田（2011）の一部として発表し、ここでは同時期の他の資料も調査したうえで

- (1) 戦後昭和20年代の後半に確認され、その後急速に浸透する「“全然”は本来否定を伴うべき副詞である」という規範意識は、その直前の時期である10年代にはまだ発生しておらず、当時のこの語の使用実態もそれを直後の時代に生み出すようなものではなかった（pp.187-188）

という結論にいたった。

この際調査した専門誌には、戦後も著名な国語学研究者として活躍した人物も多く執筆している。筆者はその一人である、戦後相模女子大・和洋女子大で教鞭をとった浅野信（1905～1984）の同時期の著書『国語の匂ひと韻』（以下「浅野（1935）」とする）に注目した。

本稿における引用中の下線は筆者による。傍点は形の違いを含め原文のママである。漢字は現行の字体に直した。

2. 浅野（1935）の記述

浅野（1935）は日本語における「句韻」¹の重要性を述べた本で、“全然”に関する記述は、「第二篇 単詞論 第一章 言語の作用——言語の社会性——」の「第一節 前説」にある。

- (2) 深い社会性を有つ言語と、それを有たない言語から受ける感じは、どれだけ言語作用の上に差隔を生ずるかといふことは、今まで種々説き及んだところであるが、更に又この警しむべき現象は、「美坊や、さう遊んでばかりゐないで少しは勉強しなさいよ」——「何言つてんのさ。お休みは遊ぶためにあるんでしょ。断然遊んぢやあわよ」といふやうな父老と子女との問答に多く見られる。「全然このお菓子好きだわ」などと云はれたら、ほとほと当惑して了ふであらう。現今の言語のかういふ差隔と浮薄さは実に甚だしいものがある。同じ家庭にありながら父老と子女との用語が殆んど別個の感をいだかしめる醜さは悲しむべきことでなければならない。—これも同様社会性の有無にあるのだ。（p. 51）

ここでは「全然このお菓子好きだわ」というセリフが、強く非難されている。それが“全然”が“好きだ”という肯定を伴っているためであるとすれば、今日まで続く「“全然”+肯定」を「誤用」視する規範意識の現れた嚆矢であり、「迷信」の発生は戦前に遡れることになる。そのような意味できわめて注目すべき記述である。しかし、浅野（1935）そしてこの記述は、“全然”に関する先行文献では全く取り上げられていない。

そこで本稿では、(1) で述べた見解を検証する意味もこめて、(2) に現れた浅野の“全然”に関する言語規範意識について、同時期の他の著作も参照しつつ考察し、なぜこのセリフが「ほとほと当惑して了ふ」ものなのかを明らかにする。

なお、本稿では新野（2011: 117-123）で述べた基準に基づき、“全然”の被修飾語の「否定」「肯定」については、

- ・ 否定—形容詞“ない”・助動詞“ない”“ず（ん）”・動詞“なくなる”“なくす”“なくなす”
- ・ 肯定—上記以外

とした。そして「肯定」をさらに以下のように5分類した。

- A 否定の意の接頭辞として使われる漢字を含む語—“不可能”“無理”“未決”“否認”など
- B 二つ以上の事物の差異を表す語—“逆”“別”“違う”“異なる”など
- C 否定的な意味の語—“廃止”“停止”“解消”“取り除く”など
- D マイナスの価値評価を表す語—“駄目”“失敗”“虚報”“的外れ”など

¹ 「句韻」とは、同書の「序」では「語の所謂「体」の奥に秘められてゐる幽玄靈妙な「連想」至乃「生動」（こゝに各語の個真性がある）の機能を構成してゐるもの」（3）と定義されているが、ほかにも何箇所かで異なった文言で定義がなされており、なかなか厳密な意味を把握しにくい概念である。結局それぞれの個所での具体例による説明から、それぞれの個所での意味を考えるしかない。

E 上記以外の、否定・マイナスの要素がない語

3. 浅野（1935）の“全然”

(2) で「全然このお菓子好きだわ」が非難されている理由については、「てよだわ」などと呼ばれ明治以来攻撃されてきた文末の「だわ」のせい、という可能性もある。この事象に浅野（1935）は全く言及していない。ここで、彼の2年前の著書である『巷間の言語省察』（以下「浅野（1933）」とする）を見てみると、

(3) 女学生などには自ら接尾辞的、詠嘆的助辞が形成され、所謂「テヨダワ」「ノヨダワ」言葉を生むに至つた。我々はこゝに女人の感情的繊細性を見ることが出来るのである。又一面その脆弱的・社交的・感傷的性質をも随伴的に認められるのである。(p. 6)

のように言及するものの、(2) のように強く非難する姿勢ではない。したがって、非難の対象はやはり「全然」である、と考えるべきである。

この時期、「全然」が否定・肯定両方を伴って使われていたことは先行研究から明らかであるが、浅野自身は、どのように使っていたのか²。

当の浅野（1935）中では、助動詞“ない”を伴う例が4例、動詞“なくなる”を伴う例が1例ある。さらに肯定のうちCの語を伴う例が次の3例である。

(4) 「残る」とか「秋」とかいふ観念は全然掃拭されてゐるのである。(p. 79)

(5) 言語の詩性(感情性)は全然失はれて枯渇しきつてゐる(理智化技巧化)のである。(p. 86)

(6) 大目に見ても余りの六十語は当然訳語を以て代らるべきか、全然破棄せらるべきものかである。(p. 170)

そしてもう1例、副詞“おほかた”の意味変化を論じる文中に、メタ言語としての例がある。

(7) 「平家物語」に清盛の後白河法皇を幽閉し奉らむとしての言葉として

……大方院への御奉公思ひ切つたり。……

といふのがある。他これに類する例が随分あるが、而もそれらは尽く「全く」「全然」或は「まるつきり」の意をなすものばかりである。然るに現今にあつては「大方」は「大体」「略」「殆んど」の意味となつてそこに幾分の漏らすところ、除くところがあるのである。(p. 114)

² 研究者のある事象に関する言語規範意識と、その実際の使い方とは必ずしも一致しない。井上史雄は、自分では「ら抜き言葉」を使っていないつもりだったのに、自分の講義のビデオテープを見たら「見れる」とはっきり言っていた、という体験談を述べている（井上 1998: 30）。

しかし、この井上のケースは講義とはいえ口頭語であり、今回の調査対象は文章語、しかも日本語関係の学術的文章の言語であるから、言語規範を守ることは特に念頭に置かれていたはずである。

ここでは、“おほかた”の意味が古くは〈完全に〉であったものが現今では〈ほとんど〉になっている、という変化を述べている。そしてここに挙がっている『平家物語』の例の「大方」は「思ひ切つたり」という肯定を伴っている。つまりここでの「全然」は、肯定を伴うことのできる〈完全に〉の意の副詞の例として挙がっているのである。

4. 浅野(1933)の“断然”と“全然”

次に、さきに挙げた浅野(1933)では、「第三篇 品種詳説 第四章 副詞」中の「三、副詞の紊乱(呼応)」で、“あに”“いはんや”“なんぞ”“けだし”等の副詞について、

- (8) 所謂再帰副詞といはるべきものであつて、従つてその結びには明瞭に一定の規定があるのである。然し現今では幾分これらが歪められ、混乱させられて使はれてゐるやうである。(p. 260)

とする。「再帰副詞」は「再帰副詞」の誤で、今日いうところの「陳述副詞」に相当する。ここでは、その例として、「さつぱり……だめだ」「よもや……まい」「まさか……まい」「てんで……ない」が出ているが、“全然”は出ていない。

さらに、“一向”“断然”“とても”“まさか”を挙げて、

- (9) これらの例は元來がその結びとして「否定語」「肯定語」を規定したものが、時代の動きに伴つて夫々その反対語を要求したものである。(p. 262)

とし、“断然”については

- (10) 断然……元來否定的語、それが肯定的になつた。しかもかなり頹乱性をもつてゐる。(p. 160)

- (11) はじめ単に強調の辞であつた、それが否定語を伴つて「—…でない」となり、又現今では「—…だ」となり、単に「急に」等の意にまで下落した。(p. 262)

とする。

さらに「断然愉快だ」「俄然腹がへつた」「果然試験だ」といった表現について

- (12) 殆んど言語の遊戯である。意味を用ゐてゐるのではない。かうした強い激越な音声を喜び、この音声を吐露することによつて感情の消却を図つてゐるに過ぎない。(p. 262)

と強く攻撃している。またほかの個所でも、当時のこれら「〇然」という語構成の漢語副詞の用法を批判している。

- (13) 「俄然」・「断然」等の言語内容, 「インチキ」等の音韻と, この語のもつ心理的意義, これらをとくと思^マうて見るがいゝ。人々は最早や言語の意義を第二義的に押下げて了つた。たゞかうした言語形式を追ひ, 弄んで纔に自らを紛らしてゐるにすぎないのである。(p. 8)
- (14) 「俄然」「断然」「果然」は現在人の焦燥積鬱を, 「モチ」は軽浮を, 「トタンに」は頹廢を夫々物語るものである。前進なき者はあらぬ道草を喰ひ淫蕩に陥る。我等はこの心理的言語にこの理を見ることが出来る。で前三者は殆んどその言語内容を正当に顧慮することなしに, その一時的につよく破裂する音を弄ぶ気持で使用せられるのである。「俄然腹がへりやがつた」, 「断然飯くはう」, 「果然うんまい」といつた調子である。だがこれらは善い方である。「断然テニスをしよう」, 「断然つかれた」といふ乱用ぶりである。(p. 44)

しかし, やはり“全然”は全く取り上げられてない。

それではこの浅野(1933)内の“全然”はどうか。形容詞“ない”を伴う1例, 助動詞“ない”を伴う2例に加え, 次のような例がある。

- (15) 「結構」といふ語がある。これは表面上甚だ「結構」な意を表すものだが, 習慣心理の顛倒から「沢山」ですの意に転化してゐる。言語の形式と内容とに就いては当時必ずしも全然一致するものではないことを思^マうて見なければならぬのである。(pp. 67-68)

この例における「全然」は, 前に「必ずしも」があるので, 明らかに「ない」ではなく, 肯定のうちEに属する「一致する」を修飾している。この例は浅野にとり規範に外れるものでなかったとなると, 同じくEに属する語を伴う「全然このお菓子好きだわ」とはどかが違うのか。

前掲の, 浅野(1933)における“断然”に対する意識を再度見てみると, 「否定語」から「肯定語」へ, という呼応の変化については(9)～(11)のように冷静かつ概ね客観的に記述しているのに対し, (12)～(14)では, 本来の「意味」「言語内容」を失い, 単に「強い激越な音声を喜び」「一時的につよく破裂する音を弄ぶ気持で使用」という変化について, 感情的と言っていい激しい口調で攻撃している。

そして, (14)で批判されている「断然飯くはう」「断然テニスをしよう」と同趣の例である「断然遊んちやあわよ」とともに, 2年後の浅野(1935)の(2)で, 「全然このお菓子好きだわ」を「社会性を持たない言語」として強く非難している。ここで言う「社会性」とは何か。

5. 浅野(1935)における「社会性」

浅野(1935)では, (2)の直前で, 「最近公用語ともいふべきものゝ変改が行はれた」と

して“かふゑー”→“会館”，“女給”→“従業婦”，“監獄”→“刑務所”，“小僧”→“小店員”といった例を挙げ、その理由を次のように述べる。

- (16) 従来 of 称呼では深刻にすぎるといふところから出ているものであろう。然らばこの深刻にすぎるとは如何なる意味であらうか。それはあまりにこれらの語に習熟^マすぎて、その意義と感情の強烈さに堪へないことに外ならないのである。つまり言語形式を更改することによつて、従来持つてゐた感情の消却と、これに伴ふ意義の転換とを図つたもの、一言にして云へば社会意識を新にするためにしたことに外ならないのである。(歴史的社會性——意義と感情＝句韻——の没却)

既に社会性(歴史的)を失つて、かく変改された語は、浅い意義しか持たない——感情性がない——従つて新語としてしか我々に響いて来ないのである。ために従来 of 語のもつてゐた「句韻」の被蔑視性・被賤視性・被憎視性を掻き捨て、全然かうした性情をもたない単純な意義のみをもつた語として、吾々に見えることが出来るのである。この点この方面に於ける成功を見たのである。しかし、これとても相当の年月を経れば亦同じことになつて了ふ。(pp. 49-50)

ある職業の呼び名が“女給”・“小僧”から“従業婦”・“小店員”と変わつても、その実態が大きく変わるわけではない。しかし、前者にある「被蔑視性・被賤視性・被憎視性」が、新語である後者にはない。つまり、「単純な意義」だけでなく、その語が社会の中で使われているうちに帯びるようになった語感やイメージといったもの(「感情＝句韻」)をも含んだ概念が、ここで言う「社会性」ということになる。そして「単詞論」の中にあるこの個所で話題になっているのはあくまで単語自体の「社会性」で、その文中での呼応については、同書の「第三篇 文章論 第二章 呼応論」という別の篇の中の「二、副詞の呼応」で論じられている。そこでは、否定と呼応する副詞として「少しも……ない」「ちつとも……ない」「一向……ない」「必ずしも……ない」などが挙げられているものの、「全然……ない」は挙げられていない(pp. 282-283)。

ということは、(2)で「全然このお菓子好きだわ」に「ほとほと当惑して了ふ」のも、この「子女」のセリフの中の「全然」が、「断然遊んぢやあわよ」の「断然」同様に、本来この副詞が持っていた〈完全に。何から何まで〉という「意味」「言語内容」を失つて単に「強い激越な音声を喜び」「一時的につよく破裂する音を弄ぶ気持で使用せられ」という、「父老」の世代から受け継ぐべき「社会性(歴史的)」を無視したものになっているから、と考えるべきである。それに対し(15)の「必ずしも全然一致するものではない」の「全然」は、〈完全に。何から何まで〉という本来の「意味」「言語内容」であり、語としての「社会性(歴史的)」を維持しているので、浅野の規範からは外れていない例となるのである³。

³ ただ、「全然このお菓子好きだわ」が、例えば「あのお菓子とこのお菓子、どっちが好き？」という問いへの答えであれば、〈100%、すべての点においてこのお菓子が好きだわ〉ということであり、「社会性(歴史的)」を失っているとはいえない。今日における「全然」+肯定を考える場合と同様、使われた場面や文脈の検討が必要である。

6. 結論

前節末で確認した事実と、第3節で見たとおり(7)で肯定を伴う「大方」の言い換え語となっていることを考え合わせると、浅野(1935)での“全然”の正誤を判断する基準は、否定を伴うか肯定を伴うかではなく、あくまで「社会性の有無」、すなわち本来の「意味」「言語内容」で使われているか否か、ということになる。

したがって(2)の下線部は、「“全然”+肯定」を「誤用」視する言語規範意識の現れと考えるべきではなく、冒頭に(1)として挙げた新野・橋本・梅林・島田(2011)での結論に修正を迫るような記述ではない、ということになるのである。

●付記●

本稿は、新野直哉「“全然”に関する国語学者浅野信の言語規範意識—昭和10年代を中心に」(『表現研究』97:1-10, 2013)の一部を抜粋し、再構成したものである。

●参考文献●

浅野信(1933)『巷間の言語省察』東京：中文館書店。

浅野信(1935)『国語の匂ひと韻』東京：大岡山書店。

井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』(岩波新書540)東京：岩波書店。

新野直哉(2011)「“全然”+肯定をめぐる研究」『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』111-215。東京：ひつじ書房。

新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子(2011)「言語の規範意識と使用実態—副詞“全然”の「迷信」めぐって」『日本語学会2011年度秋季大会予稿集』183-188。

《要旨》浅野(1935)には「“全然このお菓子好きだわ”などと云はれたら、ほとんど当惑して了ふであらう。」という一節がある。ここで「ほとんど当惑して了ふ」原因が、“全然”が“好きだ”という肯定を伴っていることであるとすれば、今日まで続く「“全然”+肯定」を「誤用」視する規範意識の発生は戦前に遡れることになる。しかし、浅野(1935)さらにそれに先立つ浅野(1933)を詳細に調査した結果、浅野(1935)で“全然”の正誤を判断する基準は、否定を伴うか肯定を伴うかではなく、あくまで「社会性の有無」、すなわち〈完全に。何から何まで〉という本来の「意味」「言語内容」で使われているか否か、ということであり、したがって問題の記述は、「“全然”+肯定」を「誤用」視する言語規範意識の現れと考えるべきではない、という結論にいたった。

Abstract: The Japanese Language Researcher Asano Shin wrote, “If someone says ‘Zenzen kono okashi suki da wa,’ the listener will probably be quite perplexed” (Asano 1935). Even today, *zenzen* + affirmative is widely regarded as incorrect usage. Is Asano’s description the first example of consciousness of this norm? Careful investigation of Asano (1935) and also Asano (1933) shows that Asano’s criterion for the proper use of *zenzen* was not whether it cooccurs with a negative but whether it is used in its original meaning of ‘entirely.’ Thus, we should not take

Asano's 1935 statement as evidence for consciousness of the norm that regards *zenzen* + affirmative as incorrect.

新野 直哉 (にいの・なおや)

国立国語研究所時空間変異研究系准教授。博士（文学）（東北大学）。宮崎大学教育学部（現：教育文化学部）助教授、国立国語研究所主任研究官、主任研究員を経て、2011年4月より現職。

主な著書・論文：『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』（ひつじ書房、2011）、「言語規範意識記述を日本語史研究資料としてどう考えるか—3人の研究者の“全然”をめぐる記述を例に」（『国語学研究』52、2013）、「新聞記事を資料とした言語意識調査—新語“なにげに”を例に」（『言語文化研究』12、2013）。

社会活動：日本語学会編集委員、日本近代語研究会運営委員。

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」

プロジェクトリーダー 新野直哉

（国立国語研究所 時空間変異研究系 准教授）

プロジェクトの概要

現代の日本語においては、次々に新語が生まれ、また以前からある語句でも、意味・用法の変化が次々に起きている。その中には、流行語のように一時的に多用されたり、メディアで話題になったりするもののほか、いつの間にか定着してしまうものも少なくない。それらの新語・新用法に関する、発生・浸透・定着の時期やそのプロセスという言語変化そのものについての研究、さらにその背景にある、正誤・好悪・美醜などに関わる一般社会の言語意識の問題について、研究を行う。必ずしも語彙研究には限定せず、文法・表現法等に関わる事例も対象とする。本研究では、現在進行中の言語変化を分析することにより、一般的な言語変化研究に応用できる理論を得る。また国語教育・日本語教育分野へ貢献するとともに、国民の知的関心に応える。